

天福寺

禅宗のひとつ、曹洞宗の寺院である天福寺は、各世帯を特定の仏寺に所属させることによって潜伏キリシタンを摘発・排除するために考案された寺請制度の一環として 1688 年に建立されました。天福寺のある東檜山地域は、他の藩に比べてあまりキリシタンに対する残忍な迫害を行わなかった佐賀藩の管轄領でした。潜伏キリシタンは寺に登録することで敬虔な仏教徒を装うことができ、佐賀藩は領内のキリシタンの存在を否認することで江戸幕府との関係を良好に保つことができたため、この寺の存在は双方に有益でした。

名目上は天福寺に属していた潜伏キリシタンたちは、かなり公然と仏教を拒否していました。例えば、彼らには寺で同胞のキリシタンの葬儀を行う際に唱える独自の「お経除けの祈り」がありました。この祈りの言葉は「お寺はあなたの敵です。そこにいる人々を信用してはいけません。あなたは聖母マリアのもとへ向かっています」というあからさまに反仏教的なものでした。

実際のところ、東檜山地域はキリシタンに大変友好的で、「檜山を一度訪れるのは（祈りの地として知られていた）岩屋山を三度訪れるのに等しい。檜山を三度訪れるのは、ローマのサンタ・エケレジアという教会を訪れるのに等しい」と言われていたほどでした。

しかし、天福寺にとっては、このような寛容な姿勢にはマイナス面もありました。1873 年にキリスト教が解禁されると、天福寺の檀家の潜伏キリシタンたちは、カトリックに戻った人々、独自の信仰を続けた人々、そして本格的に仏教に帰依することを決意した人々の 3 つのグループに等分されました。江戸時代（1603-1868）には 450 世帯だった天福寺の檀家は、現在ではわずか 180 世帯となり、その全世帯が 3 つ目のグループにあたります。

お寺の建物は 1980 年代に再建された比較的新しいものです。しかし、ここには興味深い古い品がいくつか収蔵されています。本堂に安置されている最も重要な収蔵品は、高さ 50 センチのマリア観音像です。この像は 1856 年の浦上三番崩れの際、安全のためにこの寺に持ち込まれました。穏やかな表情が聖母マリアに似ているとされています。像の頭部には、伝統的なマリアの外套の色である青色の塗料の跡が残っています。

潜伏キリシタンのロザリオやメダイ、そしてそれらを囲炉裏の上に隠すのに使われた煤だらけの竹筒は、天福寺のエントランスホールに展示されています。